

教師研修

21世紀に必要な資質・能力を育てる

小中高校大学の教員を対象に、情報化、グローバル化が急速に進む社会の変化が教育にどのような影響をもたらしているのか具体例をもとに考察するレクチャーを実施しました。あわせて開催したワークショップでは、参加者は新しく求められるようになった資質・能力を育成するための評価の理論を学び、パフォーマンス評価やオーセンティック評価のデザインに取り組みました。教育委員会や教育センターでの教員研修のほか、高校生向けの講演にも協力しています。

テストを変えることが教育を変える近道

カリフォルニア大学サンディエゴ校教授
當作靖彦



38年前にアメリカに渡り、大学で日本語教育に携わりながら、日本の教育の動向を見てきた。私が渡米したときに味わった苦労は、日本の教育が自立性を育てるものではなかったことに起因している。そして、その教育の状況は今もあまり変わっていない。自立した学習者でなければ、グローバル化がますます進む21世紀を生き抜くことは難しい。

教育が変わるには時間がかかるが、評価つまりテストを変えることが教育を変える近道となる。2013年から毎年、TJFの研修の講師を務

てきた。講演後、私のところにやってきた生徒たちと話をしたが、みんな真摯に自分の人生を模索していることがわかった。彼らの個性や能力を最大限伸ばせるような教育環境、社会環境をつくっていかねければならない。その点で私たち教育者をはじめ大人の責任は重い。

【事業データ】

レクチャー「グローバル時代のキャリア形成、ライフデザインにつながる教育」・ワークショップ「学習を促進する評価のデザイン」

期日：5/29(金)、場所：東京、主催：TJF、参加者：小中高校大学の教員約90名

レクチャー「グローバル時代の社会とつながる教育」・ワークショップ「学習を促進する評価のデザイン」：パフォーマンス評価とポートフォリオ評価を中心に」

期日：10/18(日)、場所：大阪、主催：国際教育活動ネットワーク REX-NET、TJF、参加者：小中高校大学の教員約100名

レクチャー「評価のパラダイムシフト：学習結果を見るテストから学習を促進するテストへ」・ワークショップ「言語教育におけるパフォーマンス評価：その効果的なデザインと実施方法」

期日：11/5(木)、場所：沖縄、主催：沖縄県教育委員会、共催：TJF、参加者：沖縄県立高校の外国語、国語担当教員約150名

レクチャー「グローバル時代の社会とつながる教育」・ワークショップ「学習を促進する評価のデザイン」：パフォーマンス評価とポートフォリオ評価を中心に」

期日：11/7(土)、場所：北海道、主催：北海道大学国際本部留学生センター、TJF、協力：高等学校中国語教育研究会北海道支部、国際教育活動ネットワーク REX-NET、実用英語教育学会(SPELT)、北海道高等学校英語教育研究会、参加者：小中高校大学の教員約70名

上記のほか、沖縄県高等学校長協会主催の講演、大阪府教育センター主催の講義、沖縄県立向陽高等学校主催の生徒向け講演などに協力した。

生徒の学びに役立つ評価を考えるチャンス

稲毛知子

北海道札幌旭丘高等学校教諭

21世紀を生きるうえで必要とされる課題解決力を育てる学習は、生徒全員が同じペースで、提示された知識を吸収する学習とは一線を画しています。生徒一人ひとりの「何ができる、どのくらいできる」が

違うため、生徒が目標に到達できたかを測る物差しが適切かどうか、教師はいつも自分に問いかける必要があります。もつとえば、学習する目的や目的達成のために網羅すべき項目、またどういうアプローチが必要なのかという青写真を、生徒が必要があります。この青写真こそルーブリックであり、規準(項目: criteria「何ができる」を具体的に示したもの)と基準(段階: standards「どのくらいできる」を明示した指標)を示してくれるものです。目標(goals)と自分との距離がどのくらいあるかを把握し、どのようにそれを縮めていくべきなのかを考えて、自分の学びに責任をもつきっかけを与えてくれます。

知識の暗記に終始するだけではだ

めたと頭ではわかっていても、暗記する以外(以上)に何があるのか、生徒ばかりでなく、教師もわかっていないかもしれません。しかし、ルーブリックをつくることで、学習目標や学習内容が具体的にになり、学習活動を組み立てやすくなるだけでなく、生徒それぞれの課題がどこにあるか明確にすることができます。

當作先生のワークショップでは、この、どう教えるべきか、どう評価すべきかを、協働で考え、形にするチャンスを得られます。2016年12月には本校を会場に研修が開催されます。より多くの北海道の教員が参加し、知恵を出し合う機会になることを期待しています。

これからの社会を知り、将来を考えてほしい

半嶺通男

沖縄県立向陽高等学校校長

2015年に講演「グローバル時代の教育の役割」を初めて聴きました。急速に情報化が進んでいることは認識していましたが、人工知能の発達やビッグデータの活用が私たちの生活をどのように変えつ

つあるか、

講演で示された事例は私の想像を超えるものでした。

本校の生徒たちは、比較的のんびりしてい



て、進路も県内志向が強い傾向にあります。それは悪いことではないのですが、自分たちが生きていく社会について知識を得たうえで、将来を考えていくことが必要だと思っています。そして、地元でも、国際社会でも、どういう場所に身を置いたとしても、自分の力を発揮して周りを引っ張っていくような人になってほしいと考えています。

そこで、本校国際文科コースの1年生80人と教職員を対象に當作先生に講演をお願いしました。「自分がやりたい仕事はこれからコンピューターがやるようになるかもしれないと知ってショックだったが、その分今は存在しない仕事が出てくると聞いて少し安心した」「受動的に生きるのではなく、創造力、想像力をもって生きたいと思った」など生徒の反響

も大きく、今年は2、3年生を対象に講演をお願いすることにしました。

現場が抱える課題の解決に向けて

上原信

沖縄県教育庁県立学校教育課
普通教育班指導主事

沖

縄県教育委員会では2012年から毎年、當作先生の研修を実施しており、昨年はすべての県立高校から外国語と国語の教員が参加しました。学校現場には、パフォーマンス評価の重要性はわかるが実際にどうやったらいいのかわからない、評価の基準があいまいになってしまっているのではないかと疑問や不安の声が多くあります。パフォーマンス評価するためのルーブリックについて学べる當作先生の研修は、現場の抱える課題に合致したものでした。参加教師からは、ルーブリックをつくることで明確な基準をもてるので自信をもってパフォーマンス評価に取り組める、生徒の状況に合わせて評価の観点を定めることができる、ほかの教員と評価基準を共有できるなどの反応がありました。



「伝えたいこと」を考えぬく

2015年度に2校でCMワークショップを実施しました。その1校、田園調布学園では、「オルセースクールミュージアム」(OSM)を実施するにあたり、生徒がその魅力を伝えるCMをつくることになりました。電通のCMプランナー、近藤祐見さんが講師を務める全3回のワークショップを開催。制作したCMは学校のホームページに掲載されました。

※フランス国立オルセー美術館公認のリマスターアートを学校に展示する取り組み。田園調布学園(東京)では、創立90周年行事の一つとして行われた。



伝えたいことを掘りさげるプロセスを体験させたい

田園調布学園中等部・高等部 図書館司書 野村愛子

私は学校図書館の司書として、生徒自身が疑問に思ったことを調べて、わかったことをほかの人に発表するというような探究学習を支援しています。そのなかで、「発表する」「他者に伝える」ということは、聴衆を意識すること以上に、自身の「伝えたいこと」が重要なのではないだろうか、と書いていました。調べてまとめるだけでは、どうしても表面的な意見表明にとどまりがちです。調べて思

考えたことを、いかに自身のことばにするか、この掘りさげるプロセスが足りないような気がしていたのです。

そのような折に、TJFの「小中高校教育関係者向けCMづくりワークショップ」に参加し、「これだ!」と得心がきました。つまり、本気で何かを伝えようと思うのであれば、自身の「伝えたいこと」に向き合い、とことん考えぬく作業が必要であるということでした。そのことをシンプルに、そしてわかりやすく体験できたのがCMワークショップでした。本校でのCMワークショップは、有志の生徒を対象に行いました。そのため、学年の上下関係なく関わり

合う必要があること、CMのコンテンツとなる企画自体もみんな初めての体験となること、という二重の困難さがあり、不安もありました。生徒たちはかなり苦戦した様子がかうかがわれました。正解のない問いに対して、自信がもてなかったり、自分の考えがうまく相手に伝わらないもどかしさを感じたり、そもそも何を伝えるべきかを悩んだり……。

しかし、このようなハードルが多くあるからこそ充実感もあったようです。本質を追求し、思索し、そして言葉にする、その難しさと必要性を全員が体感した濃密な時間となりました。

完成した作品例



「見てみませんか? アートで一度むけた自分」

▶田園調布学園を少しでも知っている人に、「OSM@田園調布学園」で、自分もアートを通して変われる!ということを知ってもらおうCM



アート初心者による。アート初心者のための、スクールミュージアム。

「アート初心者によるアート初心者のためのミュージアム」

▶アートに興味がない人に、アートに興味をもってもらい、他の美術館にも行きたくってもらうCM



ワークショップの流れ

第1回 (12月22日)

どんなCMをつくりたい?

- 1. CMづくりの過程を説明**
CMプランナーは、CMの目的(視た人の行動変容を促す)を達成するために「何を伝えるか=What to say」「どう伝えるか=How to say」を考える。
- 2. CMを見て気づくワーク**
TVやウェブで流れているCMをいくつか見て、「いちばん伝えたいことは何か」「それを伝えるためにどんな工夫をしているか」を分析し、全体で共有。

生徒のコメント

インパクトも必要だが、伝えたいことは何かが一番大事

CMは意図があってつくられていて、「おもしろい」と思った時点でその企業の戦略にかかっているということでもある

- 3. 「OSM@田園調布学園」の魅力**
ペアで話し合ったあと、グループでワークシートに書き出しながら共有。

- 4. 次回に向けて**
「OSMについていろいろな情報を集めておこう。自分が行きたいと思う美術展やイベントは、何をウリにして、どんなことばで伝えているのかを考えてみよう」と呼びかける。

毎回、最後に、個人で振り返りシートに書き込んだ後に、全体で一言ずつ共有した。

第2回 (1月7日)

一行コピーと企画をつくろう

- 1. CMの目的を決める**
「どんな人(ターゲット)」に「どうなってもらう(目的)」ために「何を伝えるか=What to say」「どう伝えるか=How to say」を考える。
- 2. 「OSM@田園調布学園」の魅力をつくる**
1) 「受け手」と「伝え手」の2つの立場から魅力を考える(個人)。
2) いいところ、特徴を、たくさん書き出す(個人)→グループで共有。
3) CMで「いちばん伝えたいこと」を一つに絞る(グループ)。
4) 「いちばん伝えたいこと」の特徴・魅力についていろいろな角度から考えて深める(以下、グループ)。
5) 「いちばん伝えたいこと」の魅力を一つの文章にしてみる。
6) 文章をもとに、一行コピーをつくる
7) 一行コピーを核にしながら絵(写真、動画)とことばの流れを考えて企画コンテを作成する。

思いっぴり限りの情報をしぼり出してみることが大事

何をどう伝えるか、誰に伝えるのかなど、絞りにむかえば思いっぴりハードだった

3人いれば3人それぞれの考えや思いっぴりがあっておもしろかった

自分のなかで「何となくイメージができていても、ことばで人に伝えるのが難しくてモヤモヤした

脳みそこげそう

3. 映像制作の流れと著作権や肖像権などの留意点について説明

課外 各グループで映像制作

(windows movie makerやPowerPointなどを使用)

第3回 (2月20日)

上映会

各グループの作品上映後、目的や企画意図、苦労したことなどを発表。他グループからは感想や質問。最後に、講師・近藤さんから講評をもらう。

ストーリー性を重視するCMと、美術館の魅力を伝えるCMに分かれていた。前者は見る人にとっていかにおもしろいストーリーかが大事で、後者はOSMに来るとどんなメリットがあるかを示すことが重要だと思った

伝えたいことと同じでも、ほんの少し意見が違っただけでまとまらなかったりした。でもそれぞれCMづくりの楽しさで、みんなでコマ単位で考えていくのがおもしろかった

考えたことを形にするのは案外でできる。考えるまでが大変だし、大事

自分がいいと思って相手にも相手に伝わるように。客観的にみることも、ほかの人に意見をもらうのが大事

人になにかを伝えるのはCMだけではなく、「ターゲットを決める」「核がぶれないようにする」ということをふだんから意識してやっていた

今までCMの制作について、誰がどんなふうにつくっているのかまったく知らなかった。ワークショップが知らない世界をのぞきかけになった

【事業データ】

【生徒向け】

「オルセースクールミュージアム@田園調布学園」の魅力伝えるCMをつくる
期日: 12/22(火)、1/7(木)、2/20(土)、参加者: 田園調布学園中等部・高等部のプランナー(企画委員)の中学生16人、教員8人、内容: 創立90周年記念行事の一つとして田園調布学園が実施したフランス国立オルセー美術館公認のリマスターアートを学校に展示する「オルセースクールミュージアム」の開催に向けて、その魅力を伝えるCMをつくって学校のホームページに掲載。

東南アジア圏から観光客を呼び込むために滝川市の魅力を伝えるCMをつくる
期間: 12/11(金)~12(土)、参加者: 北海道滝川西高等学校情報ビジネス科の

3年生80人、内容: 文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール(SGH)・アソシエイト校として取り組んでいる課題研究「インパウンドをターゲットとした観光プランづくり」の一環として実施。ワークショップで制作した日本語のCMをもとに英語版も制作し、課題研究発表会と滝川国際交流協会が主催する「『国際田園都市』TAKIKAWAの20年後」プレゼンテーションコンテストで発表。

【教師向け】

「私の授業」のCMをつくろう(2日間コース)

期日: 第1回: 7/18(土)、19(日)、第2回: 2016/1/31(日)、2/28(日)、場所: 東京・TJF、参加者: 第1回10名、第2回12名

12月

バディとの交流

16日
(水)

午前：山下公園など散策
午後：みなと総合高校のバディと顔合わせ

17日
(木)

バディと授業参加、放課後活動



日本の高校生活はストレスが少ないと聞いていたが、日本の高校生も勉強が難しかったり、いろいろ苦労していることがわかった。



休み時間に、バディに中国語を教える

ずっと日本語で話してくれていた。中国語を話せないことが申し訳なかった。中国語の勉強をがんばる！



学食でランチ

相手に伝える努力をたくさんできたことで少し自信がついた。



放課後、街に出かける

放課後、バディたちといっしょに遊びに出かけたとき、距離が近くなったと感じた。

18日
(金)

バディと授業参加、放課後活動、振り返り、歓送会



歓送会で、パフォーマンスを披露

19日
(土)

バディと観光、ホームビジット

日中の高校生交流 いっしょに 過ごした 4日間

日本語を学ぶ中国の高校生と日本の高校生の「りんごの交流」を行いました。今回受け入れてくれた横浜市立みなと総合高校には、国際交流に関心のある生徒たちが登録して活動するバディ制度があります。

4日間、バディの生徒たちが中国の生徒とペアになって学校生活をエスコート。中国の生徒たちは、英語や歴史、体育、家庭科など、バディと同じ授業に参加したり、放課後や休日は、バディと観光に出かけたり、ホームビジットをしたりと、日本滞在のほとんどをいっしょに過ごしました。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

● 日本では他人がよくしてくれたら必ずお礼を言う。毎日耳に入ってくる「ありがとう」は数えきれない。でも、あやまっていることもしょっちゅうで反応に少し困った。礼儀を重んじるのだろうが、窮屈に感じるときもあった。

● 自分が大きく変わったのは人との接し方で、素直にお礼とお詫びを言うようになった。これは日本人のいいところだと思う。慣れればそんなに大変ではないし、トラブルも避けられる。

◆ ふだんに比べて圧倒的にジェスチャーを使うことが増えたと、ゆっくりはっきり話すようにした。日本語を知らない中国の人とも交流してみたい。

【事業データ】

日中の高校生交流プログラム「りんごの交流」
期間：12/15(火)～20(日)、場所：神奈川県、主催：中国中等日本語課程設置校工作研究会、TJF、助成：漢語橋基金、(公財)三菱UFJ国際財団、輸送協力：ANA、参加者：中国中等日本語課程設置校工作研究会のメンバー校の生徒18名、みなと総合高校の生徒

● 中国の高校生

◆ 日本の高校生

なぜ

CMづくりワークショップをするのか

これまで、国際交流や外国語の授業などで、「伝えるために何かをつくる」発信型の活動を試みてきました。しかし、発表にいたるまでのプロセスが深められないまま、「なんとなくつくって、なんとなく発表」するだけに終わってしまうことも少なくありませんでした。外国語の授業で学んだ語彙・表現を使い、スキットやプレゼンテーションをつくって発表したり、探究学習などで調べたことを映像などにまとめてウェブサイトに掲載するといった発信型の活動は、さまざまな教室で行われていますが、同じような課題を抱えているケースもあるようです。こうした課題を踏まえ、「伝えたい相手は誰なのか、何を伝えたいと考えているのか、相手に伝えるためにはどう表現したらいいか」を深く掘りさげるプロセスを、発信型の活動にしっかり位置づけたいと思い、CMづくりワークショップを始めました。

電通のCMプランナーでワークショップデザイナーでもある講師の近藤祐見さんには、授業や活動の趣旨に合わせて、毎回、内容と流れをアレンジしてもらっています。参加者がアイディアや表現を生み出せずに行きづまっているときに、「一つの方向性」に誘導することなく、状況に合わせてさりげなくヒントを出すことができるのは、「この先の進め方」を樹形図のように複数描けるプロならではのです。

CMという手法のよさ

▶ "What to say"の追求に集中できる

CMは通常15～30秒で表現する媒体であるため、「What to say」(伝えたいこと)を一つに絞らざるを得ない。「本当に伝えたいことは何なのか」を徹底的に掘りさげ、さらに「一行コピー」として「伝えることば」に落とし込むプロセスを体験できる。

▶ こだわりを生む

表現時間が短いため一つひとつのカットが映像全体に大きな影響を与える。そのため、どういふことばや画像を選ぶか、どの順番で構成するかなど、作り手のこだわりを生みやすく、グループで制作する場合、それが真剣なディスカッションにつながるが多い。

▶ ゴールの形をイメージしやすい

日常生活でよく見聞きしていて完成形を何となくわかっているの、"What to say"を追求する過程で行きまったり、議論が脱線したりしても、最後までゴールを見失わずに取り組める。

▶ 伝える相手を意識できる

すべてのCMには、必ず、ターゲットと、その伝える相手にどのような行動の変容を起こしたいかという意図がある。「自分たちがおもしろい」だけでなく、「誰に、何を伝える」ために作るのかを意識することが常に求められる。

(担当：室中直美)

伝わるうれしさが原点

近藤祐見
電通CMプランナー

CMワークショップをやるようになって、自分がCMの企画制作のために身につけたスキルや経験というもの、単にCMをつくるためだけではなく、もっと広く、他者とのコミュニケーションに役立つものであるということに気がきました。

みなでCMづくりの過程をひとつずつ丁寧にやってみると、参加者

にさまざまな気づきが生まれます。「伝えたいことを絞るのは大切だと思った」「相手がどう受け取るのか想像しなくては」などなど。その気づきが、次の日からのことば選びや受け答えの変化につながり、コミュニケーションが良いものになっていくのではないかと思います。

参加の皆さんの「伝えたい」「伝わった」「うれしい」という純粋な気持ちにハッとすることも多く、自分自身、仕事の大切な原点に戻る気がします。

これまでの参加者の声

生徒

▶ 言いたことがありすぎて混乱することがよくある。伝えることを決めて、そこから逆算して表現していくCMの方法は、これからの人生に役に立つ。
▶ チームメイトとどの写真を使うかで意見が対立し、ものすごく時間がかかった。でも、妥協せずに話し合っで決めたので、納得できた。

教師

▶ 誰に何を伝えたいのかは国語でもよくやっているが、CMという短い時間で視覚に訴えるものだと、より深く考えることができる。
▶ 導き方が参考になる。(自分の授業をテーマにCMをつくることで)教師としての自分の使命、価値観を考える機会になった。



生徒向けワークショップは、先生方の要望があれば、TJFが学校に出向き行っています。TJFが主催する教師向けワークショップは、TJFのウェブサイトやメルマガ「わやわや」でご案内しています(「わやわや」は33ページ参照)。